

山形県の野菜の

現況と将来対策

山形野菜センター

相 沢 富 夫

(1) 現況と特質

山形県の野菜栽培面積は10,800ha、100,600戸の農家が多かれ、少なかれ栽培しており、1戸平均約10.7aの作付にすぎない小規模多品目生産で、自給的な色彩が極めて強く、販売品目を作ったとしても地場市場に個人出荷が主体で、農協系統利用共販率は27%にすぎない。

また「農業の粗生産額と構成比」(第1表)をみると果樹は青森県に次ぎ東北第2であるが、野菜の場合はその反対で秋田県に次ぎ下から2番目にあり、全国平均や東北平均より低く、6.6%という状態である。

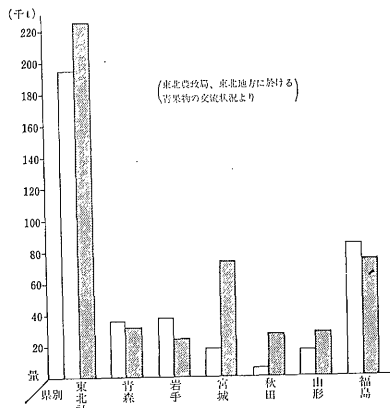
第1表 農業粗生産額と構成比 (昭和53年)

区 分	総 額 (億円)	構 成 比 (%)							
		米	麦類	野菜	果樹	花き	工業作物	養蚕	畜産
全 国	103,670	35.5	1.0	14.9	7.2	1.4	5.0	1.7	28.3
東 北	18,753	53.1	0.1	8.8	7.9	0.3	4.8	1.8	21.1
青 森	3,006	45.7	0.0	9.7	21.7	0.1	4.0	0.1	16.3
岩 手	3,014	44.5	0.2	7.7	3.0	0.2	7.5	0.6	34.2
宮 城	3,227	60.2	0.1	8.5	1.2	0.5	2.0	1.0	24.3
秋 田	2,773	71.5	0.2	6.2	3.4	0.1	2.1	0.0	14.1
山 形	2,968	58.6	0.0	6.6	12.5	0.2	2.3	1.3	17.0
福 島	3,766	42.0	0.2	12.9	6.1	0.5	9.6	6.4	19.9

(農水省統計情報部、生産農業所得統計より)

一方「東北地域における主要野菜の移出入」(第1図)をみると管外出荷量は秋田県に次ぎ少なく、福島県は最も多く、次に岩手県、

第1図 東北地域における主要野菜の移出入 (昭和53年)



青森県の順に多くなっている。また管外より入荷量では、宮城、山形、秋田の県は出荷量よりはるかに多く、これからみても秋田県

と山形県は共に野菜園芸に関するかぎり、残念ながら東北地方での底辺の位置にあることは明らかである。

山形県は東北南部の地域にありながら奥羽山脈を境にして秋田県と共に日本海に面し、地域によっては毎年豪

雪に見舞れるところもあり、太平洋側のように露地周年栽培は不可能である。現在230ha前後の周年栽培可能な施設はあるが、技術レベル、冬期間の日照不足、暖房その他に要する生産費や流通面からみて、せっかくの施設を完全に活しきれない困難な面が残っている。

このように太平洋側各県に比較して、気象的制約を強く受けるだけでなく、交通や地理的条件も悪く、夏場は出荷販売ができて、冬期間はその殆んどを他県からの移入に依存しなければならぬのが現状である。

(2) 県内各地域の実態

県内に栽培されている野菜の品目をみると、東北地方で栽培されている殆んどのものが作られており、公の統計にのっている品目だけでも30種類以上にのぼり、これらの品目別作付面積(第2表)をみると1,000ha以上のものは「すいか」と「だいこん」の2品目だけであり、500ha以上1,000ha以下のものでも、「きゅうり」、「なす」、「はくさい」の3品目にすぎない。

この栽培面積を各地方別にみると、村山地方が最も多く、全体の46.9%を占め、次に庄内地方28.0%、置賜地方18.5%、最上地方は最も少なく6.6%である。

このように山形市を中心とした村山地方が県内の野菜生産地になっている。また庄内砂丘も野菜の栽培面積が多く、特に「露地メロン」、「ねぎ」、「ながいも」は砂丘地の特産品目で、「えだまめ」、「さやえんどう」とあわせて、村山地方よりも面積が多くなっている。

最上地方及び置賜地方は山間山麓の豪雪地帯が多く、かつ無霜期間が短いため野菜栽培の環境としては必ずしも適地とはいえないところが多い。従って、「置賜」は村山、庄内の両地方に次ぐがその中でも比較的栽培面積の多い品目は「なす」、「はくさい」、「せいさい」などである。最上地方は最近ようやく野菜作りを経営の中に導入するようになってきたが、まだまだ技術も低く、面積は前述の如くで県内最下位である。

次に野菜の10a当り収量(第3表)をみると、全国及び東北地方の平均収量よりも多い品目は「トマト」、「すいか」、「かぼちゃ」、「えだまめ」、「スイートコーン」、「さやえんどう」6の品目、全国及び東北地方の平均収量よりも少ない品目は、「ピーマン」、「いちご」、「きゃべつ」、「ほうれんそう」、「にんじん」、「さといも」、「ながいも」7品目である。

これらの収量を地方別にみると、村山地方が県内のトップで全般的に最も多く、次に置賜地方が僅少なから庄内地方より優り、最低は最上地方になっている。

村山地方で収量の多いのは「トマト」、「かぼちゃ」、

「すいか」、「えだまめ」、「スイートコーン」、「ねぎ」、「かぶ」、「ごぼう」などで、これらは全国及び東北地方

「だいこん」など非常に良質のものが生産されている。最近砂丘開発が進み灌水施設も大分備ってきたので、今後はますます量質共に向上が期待される。置賜、最上両

(第2表) 県内各地域別の野菜栽培面積 (昭和55-56年)

区 分	きゅうり	トマト	なす	ピーマン	かぼちゃ	いちご	すいか	露地メロン	ハウスメロン	さやえんどう	えだまめ	さいいんげん	スイートコーン	きゃべつ	はくさい	ほうれんそう
山形県	752	494	934	49	199	335	1,100	453	10	99	393	234	203	373	680	208
村山	444	272	343	19	105	120	753	89	7	31	144	106	111	143	360	128
最上	52	55	74	3	17	2	24	4	—	7	17	19	31	11	60	6
置賜	123	99	287	14	44	22	119	17	3	20	77	56	43	100	152	51
庄内	133	68	230	13	33	191	208	343	—	41	155	53	18	119	108	23
区 分	ねぎ	たまねぎ	レタス	セロリ	カリフラワー	だいこん	かぶ	にんじん	ごぼう	さといも	ながいも	にんにく	アスパラガス	せいさい	その他	計
山形県	469	17	38	3	45	1,610	146	169	162	227	140	65	95	406	642	10,750
村山	178	7	26	3	24	679	58	74	74	106	58	24	34	247	—	5,040
最上	25	—	0	0	1	148	12	12	12	27	12	6	13	19	—	710
置賜	80	0	0	—	9	263	18	22	32	40	8	20	23	132	—	1,990
庄内	186	10	12	0	11	515	58	61	44	54	62	15	25	8	—	3,010

(山形県農林統計協会資料より)

平均収量より優っている、特に目立つのは「トマト」と「すいか」である。反対に収量の少ないものは、「いち

地方は野菜に適しないところが多いが、それなりの環境を十分活して、果菜類に限ぎらず種類や品種の選定を上手に行なって産地化にもう一步前進すべきである。

(表3) 県内各地域別の野菜の10a当たり面積 (kg)

②産地の団地化と技術水準の高位平準化……地場市場向

区 分	きゅうり	トマト	なす	ピーマン	かぼちゃ	いちご	すいか	露地メロン	ハウスメロン	さやえんどう	えだまめ	さいいんげん	スイートコーン	きゃべつ	はくさい
全 国	4,030	5,250	2,880	3,410	1,560	1,620	2,960	2,010	2,880	620	850	790	1,030	3,600	4,200
東 北	3,700	4,570	1,490	1,920	1,280	1,340	2,680	1,650	1,730	692	775	695	887	2,570	2,690
山形県	2,730	5,500	1,660	1,460	1,690	1,040	3,350	1,810	2,180	867	1,070	762	1,140	2,310	2,940
村山	3,300	6,120	2,060	1,780	1,830	875	3,880	1,760	2,400	929	1,070	792	1,280	2,640	3,290
最上	1,310	5,410	1,140	1,120	1,450	826	1,530	813	—	764	1,370	758	1,020	1,670	2,260
置賜	1,920	4,770	1,150	1,380	1,640	623	2,530	1,480	2,240	900	1,230	725	919	2,260	2,880
庄内	2,160	4,110	1,860	1,150	1,440	1,190	2,100	1,850	—	817	968	743	1,010	2,000	2,210
区 分	ほうれんそう	ねぎ	たまねぎ	レタス	セロリ	カリフラワー	だいこん	かぶ	にんじん	ごぼう	さといも	ながいも	にんにく	アスパラガス	せいさい
全 国	1,480	2,260	4,090	2,070	4,750	1,560	3,700	2,510	2,490	1,790	1,450	1,690	—	—	—
東 北	1,430	1,600	1,890	1,680	1,830	1,280	3,190	1,840	1,600	1,320	1,090	1,730	—	—	—
山形県	1,380	2,250	2,090	1,710	2,620	1,490	3,570	2,210	1,180	1,600	856	1,540	711	384	3,930
村山	1,440	2,850	2,360	1,920	3,000	1,470	3,530	2,670	1,300	1,800	919	1,570	767	594	4,130
最上	845	1,400	—	1,200	1,000	857	3,170	1,630	850	1,280	704	1,160	607	303	2,500
置賜	1,380	2,030	1,900	1,500	—	1,430	4,370	2,840	974	1,540	623	1,140	631	248	3,900
庄内	1,150	1,880	1,930	1,200	1,100	1,420	3,310	1,690	1,170	1,370	981	1,640	753	256	1,650

(山形県農林統計協会資料より)

ご、「露地メロン」、「カリフラワー」であり、これらは山形県の平均収量より低い。

置賜地方で収量の多いものは、「だいこん」と「かぶ」であり、庄内地方では「いちご」と「露地メロン」及び「ながいも」が多くなっている。最上地方では殆どどの品目が他地方より少なく、環境の悪いのに加えて技術の低さが現われている。

(3) 山形県の野菜振興のために

①地の利をもっと活して、山形県は日本海に面し地域によっては毎年豪雪に見舞れ、かつ11月から3月までの日照量が極めて少なく、太平洋岸の県に比べて環境は一段と厳しい。しかし山形県でも内陸地方は、春の気温上昇も早く風も少なく、青森県や岩手県に比べてまだまだ条件は恵まれている。従って、6月最盛期の「きゅうり」のトンネル栽培を主とした国の指定産地になっているが、もっと面積も増し団地化する必要がある。

庄内地方では砂丘の「メロン」、「ながいも」、「ねぎ」、

けの多品目少量生産主義から、少品目多量生産に切替えかつ団地化を計ることが大切である。共販率を高め、1農協1品目1億円位いの取扱いを当面の目標にしなければならぬ。その為にも生産者も農協人も共に統制力を強め、同時に生産技術水準も高位平準化をはかるべく努力しなければならない。1人の100歩前進より、全体の1歩前進が、強い産地を作る為により重要な条件となる。こういう考で気象や地理的条件の悪い面を、少しでもカバーしていく必要がある。

③組織の強化と農協統制率のアップ。……山形県の園芸振興の阻害要因となっていた2つの連合会(県経済連と県青果連)もようやく合併し、経済連1本に纏まったがこれら農協を含めた系統機関の内容の充実を計り、「作れば売ってやる」という考え方を捨てて、積極的にかつ徹底して野菜の産地作りと団地化に取り組むと同時に、農協統制率のアップに全力投球する必要がある。